FWO -ファンタジー ウォー オンライン-

凱旋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＷＯ　－ファンタジー　ウォー　オンライン－

【Ｎコード】
Ｎ９５４４Ｗ

【作者名】
凱旋

【あらすじ】
主人公の【シオン】が、ＶＲＭＭＯにて、俺達（３人で順番に書いてます）とオリジナルキャラと、【元の世界】に戻るために、超レアなアイテム【神聖な結晶】をもとめて、戦う話です。

この話は、俺達のノベルパークにて、掲載しています。
ここでは、俺達のノベルパークの最新作が投稿された時に、１つ前の作品を投稿するので、いち早く見たい人はどうぞ
ｈｔｔｐ：／／ｍ－ｐｅ．ｔｖ／ｕ／ｐａｇｅ．ｐｈｐ?ｕｉｄ＝

gaisen29&p;id=1

1．プロローグ

―空間内想定時刻１８：４５―
荒野にて

はぁ・・・ッ！
凱旋そっち行ったぞ！
―男が双刀を振りかざす―

任せろよっ！
―違う男が双銃から閃光を放つ―

下がれ凱旋！和裏とナツはミドルレンジ！
失せろ化物！！
―また違う男が指示を出し、黒く大きな筒を構え、漆黒の巨体へと向けた―

シオンッ！もう持たねえって！早く撃て！！
―双剣士と両手剣士が叫ぶ―

よし皆離れろ！行くぞ！！
―男は叫ぶと同時に黒い筒のトリガーを引く、すると黒い筒から光が尾を引いて漆黒の巨体へ吸い込まれ、一段と光が強くなったかと思うと巨体はたちまち爆散した―

はぁ・・・終わった・・・リバース・・・
―そう呟くと手元の黒い筒はデータの断片と化し、完全に消滅した―

おいシオン！ボーッとするな！日没が近いんだ、ベヒモスより凶暴な奴がわんさか来るぜ…さっさと帰ろう
ー そう言うと双銃士は懐から「泡沫の結晶」を取り出したー

なんだそれ？
ー 両手剣士が聞くー

これで街にひとっ飛びだぜ
ー 双銃士が眼を閉じる、すると水晶が輝き始め、メンバーの体を透き通すー

うっひゃぁぁあ！見ろよこれ、って待て待て俺も連れてけって〜！
ー 双剣士は両手一杯にモンスターの残骸を抱えてメンバーの元へ走るー

さて、じゃあ帰るぞ
ー 水晶が煌めくとその場には誰も居なくなったー

ーこれは、空想世界での現実を超越した物語。ー

ファンタジーウォーオンライン
〜そして歯車は廻り出す〜

1．プロローグ（後書き）

えー管理人（凱旋）よりさきに執筆させて頂きました和裏です！
ファンタジーウォーオンライン、記念すべきプロローグ執筆終了です～
実は執筆の順番、じゃんけんで決まったんですｗｗ
不運？幸運？にも俺が一番手になったわけですｗ
さてこれからシオンたちに何が起こるか楽しみですー
では管理人（凱旋）！次よろしく！

2．始まりの宴

－1ヶ月前－
－地球時間14時15分－

5時間目の授業の終了をつげるチャイムが、目覚ましとなる
「ん、んー」
しおんは、ゆっくり目覚める

「あ、そうだ、早く帰んなきゃ！」
しおんはバックの中に教科書やらノートやらをつめる

「はやく行こうぜ！」
と誰かの声がする

「わかってるよ凱旋」

二人はいそいで昇降口をでると、正門へ向かい正門を抜けるとそれぞれの家に向かった

数年前、某大手企業が、人が1人入れるほどのゲーム機を発売した、思ったより価格が安く、酸素カプセルみたいな形で、子供もなんとか買える値段だった

それぞれ家でゲームを起動する
操作はいたって簡単　スイッチを入れ、ディスクを入れて、中に入り、鍵をかけ、始動ボタンを押す、そうすると、じょじょに眠っていき、眠りについたころに、ゲーム内に入っているという仕組みだ

最初にアバター設定が出てきた、シオンは、クールでかっこいい感じにしたかったが、笑われるのが嫌なので、ｆｒｅｅを選択した、ｆｒｅｅとは、現実の自分と全く同じ体つきになることだ

設定が終わると、チュートリアルが始まったが、ほとんど聞き流し、そして、職業設定へ

職業は、Ｂ級　Ａ級　Ｓ級　とあり、最初はＢ級が選べて、条件を満たすと、Ａ，Ｓへとあがれるらしい

職業については、また今度話すとしよう

しおんは銃が好きなので、バレットマスターを選んだ
この職業は、主に両手銃を扱える

徐々に設定フィールドから、ＦＷＯの世界へと変わる
「おあー」シオンはポカンと大口開けながら周りを見た

現実となんら変わらない景色
本当にゲームの世界なのか疑わせる

「おーい　シオーン」
声がする方向を見ると凱旋が歩いてきた

「どんな武器だった？」
と言われ、手元を見ると、片手で持てるか持てないぐらいの大きさの塊があった

「これ、銃？　ほんもの？　まじか、」
だが、その銃は、見たことのないもので、

強さが全くわからなかった

「凱旋、これなんて武器？」
と、聞いてみるが、凱旋にもわからないようで、首をふった

「俺はＧ１８だったぜ、単品だけど、」
Ｇ１８は、連射が早いが、単発だと、弱すぎて使い物にならない

武器はランダムらしいから、強い武器かもしれないし、弱い武器かもしれない

その後、シオンと凱旋が、森へ行くと、
１人の人に出会う　年上のようだ

「もしかして和裏か？」
「おお、久しぶり！」
おたがい驚いたようだが、シオンは誰だかわからない

「こいつは俺が現実世界で引っ越す前の友人だ」
「よろしく、和裏で～す」
「よろしく、シオンと言います。」

和裏は実はこの世界（ゲーム）をβテストの時からやっていて、全てのデータを受け継ぎしてきたのだ。

「とりあえず、βの時の受け継ぎで金が多少あるから、奢ってやるからたべに行こうぜ、
二人の始まりを祝った宴といこうじゃないか」

三人は、このあと、なにが起きるかも知らずに、宴を始めた　～

2．始まりの宴（後書き）

こんちゃ！はじめまして～凱旋でえぇっす！
これ書いたとき朝の５時とか、ほぼ適当ｗ
結構重要な部分だから、他の２人に見てもらおうと思ったらどっちも夕方までこねぇ～のｗ
とりあえず、ｏｋしてもらったんで貼りますｂ
次回はナツさんでぉぇっすｂ
がんばｂｂｂ

3．ああ、管理人はロクデナシ

ー空想時間１９時５０分ー

「いやー食った、食った」

シオンはお腹を叩きながらそう言った。

「和裏こんなけ食って金は大丈夫なのか？」

凱旋もキツそうな顔をしながら和裏に聞いた。

「平気、平気この俺を誰だと思ってるよβ上がりの和裏様だぜ！」

他の二人はキツそうな中和裏だけは意気揚々とそう言った

「マジで金足りねえとか言われても貸す金もねーぜ俺たち初期なんだから」

「うっせーな凱旋足りるってそんなに心配すんなよ」

「けど、マジで足りなかったらシャレになんねーぜ」

街で犯罪行為をおこすとどこからともなくガーディアンが湧いてきて捕まればアカウント消去も免れない。

「じゃあそろそろお会計といこーぜ！」

ＮＰＣが「お会計は3万ギルです」

と笑顔で言ったその笑顔はもうＮＰＣとは思えないこれは天使天使だあああああああああ！

と思ってるところに凱旋からひじ打ちが来た。

「なんだよ痛てーな！わかってる、わかってるで、何ギルだっけ？」

「3万ギルだとさ」

シオンがそう言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

和裏は感情表現システム全開で汗をダラダラ流していた。

「ま、まさか足りねーのか？」

コ、コクン和裏は頷いた。

「ちょ、マジかよ！どうすんだよ！初日でアカウント消去とかマジないぜ！」

凱旋は焦った様子でそう言う。

「あの・・・よければギル貸しましょうか？」

三人は同時に振り返った。そこには女神がいた・・・

「じ、実はあと5千ギル足りなくて」

和裏は心底すまなそうにそう言った。

「はい、ではどうぞ」

その女の人は5千ギルをリアリティ化し渡してくれた。

「ありがとうございます！」

三人は同時に土下座しそう言った。

「いや、本当にありがとうございました」

三人はお礼を言っても足りない気持ちで何回も謝り続けていた。

「5千ギルなんだし、すぐにまた貯まるから気にしないで」

シオンはもう恥ずかしいやらなんやらで少し泣きそうになった初日から宴でしかもお金が足りないとか普通ありえんだろ！

心のなかではずっとこんな事を思っていた。

「あのーお名前はなんでしょうか？」

シオンは聞いた相手が女の人だったし少しくらいキモイと思われてもいいから聞いておきたかった。

「名前はルリです」

なんとその人は少しも嫌な顔もせずに頭まで下げながら名前を言ってくれた。

「あの、少しでもお礼をしたいので、猫の手でも借りたいときは僕らを呼んでください、そのうち二人は初期ですけど・・・」

と言いながら拒否も覚悟でフレンド申請を送ってみる。

ルリは最初少し驚いたような顔をしていたが承諾してくれた。

「これからよろしくお願いしますね、シオンさん、凱旋さん、和裏さん」

ここは仮想世界なんだから敬語なんて使わなくていいのだがルリは律儀に頭まで下げながらそう言った。

「私、今から行かないといけないところがあるので」

と、頭を下げながら言う。

俺たち三人は笑顔で
「また、今度ーーーー！」
と、言った。

「いやー俺たち初日で可愛い女の子とフレンドになれるとかやばくね！？」
と、和裏は心底嬉しそうにそう言った。
ついさっきまで冷や汗ダラダラ流していたのが嘘のようだ。
だが俺たち二人は誰もそこにはつっこまなかった和裏以外の二人も心底うれしいからだ。

三人は道の真ん中で騒ぎ続けた。
だが、騒げていたのはそこまでだった。

三人の視界は暗転した・・・・

次に目を開けた時は全てが真っ白だった
なにもないいや・・・なにもない事はない
人が沢山いる。
これは全プレイヤーだろうか？
見える限りで１万は余裕で超えている。
何が始まるのだろうか？
上を見るとデカイいや巨大なドラゴンがいた。
ドラゴンが口を開けるブレス攻撃か！？
俺は身構えたがそんな事はなかった
ドラゴンはしゃべりだしたのだ。

「皆さんよぉーくぞ集まってくれました！これから　ＦＷＯ・・・
ファンタジーウォーオンラインを始めまーーーす！」
うるせえ！もうＦＷＯは始まってるだろうがひっこめ！

誰かがそう言った。

「うーーん？誰がＦＷＯが始まったと言いました？
この創造神である私が言ってないのだから始まってるわけないじゃありませんかっ！」

これであのドラゴンは管理人が操作しているものとわかった。
だが、なぜ管理人が出てくる必要があるのか。
その答えはすぐに返ってきた。

「皆さんもなぜ管理人がでてくるのか？そう思ってますよねーーー？
それはなぜか！お答えしましょう！これは実験なのです！」
・・・・・は？俺は自分の耳を疑った実験だって？
なんの実験なのか？なんのためなのか？

「じぃーーつはですねー私はゲームを作りますが本当は科学者なのでーーーすよっ！
だからですねー人間は死地に追い込まれるとどうなるのか？っということに興味が非常にあるのです！
ですが法律で人を実験として使うことは犯罪なのですよっ！
だからですねーこうして私が創造神となれば人を実験する事も可能なのですよっ！」

ふざけんなー！ログアウトしてやる！誰かが叫んだ。

「ログアウトしたいならすればいいのでーーす！命の保障はできませんがっ！
一つ忠告しておくとですねーログアウトまたはＨＰがなくなった場合はですねー！
そのウォーカプセルの中の空気がなくなって窒息死してしまいますよーーー？

ちなみにウォーカプセルは鍵がかかってまーす！
硬度もダイヤモンド以上なので絶対に開ません　　よーー
ーーう？
まあ、正確に言うとＨＰが全損またはログアウトした時電源を
落とした時から
１時間３０分で全ての酸素がなくなるのですね！」
人々はざわめいた。ある人は泣き叫び、ある人は暴言を吐きま
くり、ある人は管理人への攻撃を試みた。

「ここには3万4千人のプレイヤーが存在しているのでーす！
その中でこの世にたった1つ存在する超レアアイテムをゲットすると
そのギルドのメンバーは現実に帰還できるのでーす！
ちなみに超レアアイテムは見つけるたびに移動するのでーす！」
人々は再びざわめいた。
僕はもう何がなんだかわからなかった。
こいつは何を言っているんだ？
そんなの何のためになるんだ？
だが、そんなシオンの事はおかまいなしに管理人は
最後の言葉をのべた・・・・

「それでは、ご健闘をお祈りしているのでーす！」

俺の視界はまた暗転した。
次に目を開けると、どこかの町だったフィールドは見渡しても
端が見えない。

「くそっ！なんだってんだ！」
シオンは叫びながら恐怖などの気持ちを押し殺し仲間の二人に
会うため荒野を走った・・・・・・・

3．ああ、管理人はロクデナシ（後書き）

いやーやっと書けましたよ！
なんか僕の前のだれかさんが途中で終わらすから
大変続きを書くのがてこずった！
まあ、愚痴はこれくらいにして（笑）
今回書きましたナツですいやー適当に書きました
本能が命ずるままに書きました。
次は和裏かな？かな？
まあ、誰でもいいけど（笑）
これからどうなるんでしょうね？
僕はこの先一切考えていません！
まあ、後の二人におまかせだなーではまた！

4．狂科学者の悪戯

想定時刻－２０：１５－

「それでは、ご健闘をお祈りしているのでーす！」

妙に間延びした声が頭を駆け巡る。

「はぁ…っ、はぁ…っ」

シオンはただひたすら荒野を真っ直ぐ駆ける。

視界中央にバイタルチェッカーの異常を知らせるウインドウが表示される。

「はぁ……っ、さ、酸欠か…走りすぎたか…」

次第に視界がぼやけて意識が遠退いてゆく。

「凱旋…和裏…ルリ…みんな……何処なの…」

朦朧とするシオンの前に下級のモンスターが気配を察し、近づいて来た。

「はは…敵だ、戦わなくちゃ…あれ、武器が出ない？」

どうやらバイタルチェッカーに異常がある時は現実世界のプレイヤーへの負担を考慮し、下級プレイヤーの戦闘は禁止されているようだ。

「…いきなりゲームオーバーか……はっ」

モンスターが丸腰のシオンへ飛びかかりシオンを噛み殺す、

はずだった。

シオンの耳元を一陣の光が横切り、モンスターの頭部へ突き刺さる。

「シオン！大丈夫か！！」　ーあぁ、凱旋、助けに来てくれたのかー

「一体だけじゃないか、まあ分かってたけどな、シオン、しばらく寝てな。」

凱旋はモンスターの死角にシオンを寝かせた。

「よし、記念すべき第二回戦だ、行くぞ！」

凱旋は拳銃を構えるとモンスターの群れへ威嚇発砲だろうか、一発銃弾を放った、それが気に触った犬型モンスターは我先にと凱旋めがけ駆け出した。

「ふっ！はっ！こりゃ長期戦になっかな…」

などと凱旋が呟く。

一匹のモンスターへ命中した弾丸が他とは違う派手なエフェクトを見せ、命中したモンスターは断末魔を短く上げ、爆散した。

「…いわゆるクリティカル、か…っとお！いたたた」

モンスターの群れはいつしか一匹になっていた、しかし凱旋も無傷という訳にも行かなかった。

「弾がもったいないな、そうか！こうしよう！」　凱旋はモンスターの足元へ銃弾を放った。すると犬型モンスターは「キャウン！」という犬らしい悲鳴を上げ逃げ去った。

「よっし！おっレベル上がったw」

「さすがだね、凱旋」

「あっシオン大丈夫か！いつの間に起きてたんだよ」

「ついさっきだよ？もう大丈夫だから、それより、他の皆は？」

シオンがそう聞くと凱旋は少し俯き気味に

「それがお前以外には会ってないんだ…あでもさっきすれ違った人に聞いたけど、向こうにしばらく行くと町があるってよ、」

「そっか…じゃあとりあえず町の方に行ってみよっか」

そう言うと二人は歩き出した。

ー想定時刻２０：１２ー

「それでは、ご健闘をお祈りしているのでーす！」

視界が暗闇に包まれた。

凱旋とシオンは闇に包まれたらしい。

「ぐっ！強制転移か！しっかし！β版プレイヤーをナメるなよ！！」

和裏は剣を抜き放ち目の前に広がる闇を切り裂いた。

闇が消え、視界が戻ると、和裏を含め数人佇んでいた。

「あれ？ルリ！？ルリか！？」

ルリらしき人物を見つけた。

「和裏さん！？ご無事でしたか！和裏さんもβ版プレイヤーだった

んですね？」

「ああ、それより、その男の人は？」
和裏が興奮気味に聞く

「この方ですか？この方は私が先ほど男集団に絡まれてたところを助けてもらったナツさんです。」
和裏には最後だけで充分だった。

「ナツ！？あ、あのナツか！」
和裏が我を忘れ叫ぶ。

「お前こそあの和裏かよ！？」

「あ、あの、和裏さん？知り合いでしたの？」
ルリは男二人を交互に見てあわあわ言いながら尋ねた。

「ああ、ガキの頃よく遊んでてな、中学くらいで引っ越したきりなんだ」
ナツと突っつき合いながら和裏が言う。

「なあ和裏、こんな事やってる場合じゃないぜ」
ナツがドラゴンを指差す。

「β版、、、研究には邪魔な不確定要素ですねえ～、消しましょうか。おやこんなところに良い材料が紛れてマスね～」
ドラゴンはひょいとルリを掴み上げる。

「「やめろぉぉぉ！！」」
和裏、ナツが一斉に斬りかかる、があっさり弾かれてしまった。

「フフフ、この小娘はしばらくワタシが研究しよう…皆さん、今回は命拾いしましたねえ～次は確実に消しますよ、ではまた会いまｓ（ｒｙ」
ドラゴンの頭から地面へ垂直に線が入った。
と思うと線から真っ二つに割れ、爆散した、

「また会いましょうじゃねえよ、さあ、あんたらさっさと行きな。」
大剣を手にした男が言う。

「い、行こうぜ和裏（汗」

「あっ！ルリまってくれ！…行っちまった……仕方ない、行こうか。」
和裏が言い切る前にルリは姿を消した。

（あれが噂の…まあいい、戻るか）
大剣の男がボソリと呟き、高く飛び上がり、消えた。

「しっかし、シオンと凱旋は何処に行ったんだろうな…」
和裏が心配そうに言う。

「凱旋も居るのか！？」
ナツが驚く。

「ああ、居るよ、それと、シオンってのは凱旋の友達な」
和裏は説明した。

「なるほどなあ、じゃあこれから探すだろ？何処から行こうか」

「地図あるけど。」
和裏がボソリと呟いた

「マジか！ヘイパス！」
和裏の手からパシリと地図を奪う。
「あっ！おい…パスじゃねぇし…赤い点があるだろ？それが俺達だ。」
和裏が軽く突っ込んだ後、説明を付け足す。

「んーとりあえずこの町から行ってみる？」
と赤い点から最寄りの町を指差す。

「荒野通るのか…まあいいや、じゃあ行こうか」
嫌そうに呟く。

「なんだよ嫌そうにして～」
ナツが聞く

「いやぁ、群れが鬱陶しいんだよな～まあ蹴散らせるけど。」

「あぁなるほど、って自慢すんなや！」

「まあまあ落ち着けｗほら、日没だから気を引き締めて行かないと…」
そう言うと二人は歩き出した。

（そういやルリ、和裏さんもβ版プレイヤーだったんですねって言ってたけど、まさかルリも？）

4．狂科学者の悪戯（後書き）

どうもおはようからおやすみまであなたを見守る和裏ですｗｗ
戦闘シーン書くのはすっごい手に汗握ってぬるぬるしますｗ
ではでは次頼んだよ！

5．時計塔の町

想定時刻－２０：１３－

「あれ、」
「ん？どうした？」
凱旋は自分の持っている銃を見て、気づいた
「弾薬が少ない、んー、マガジンがそこらへんに落ちていればいいけどｗ　そんなことあるわけないなｗ」
そんなことを言いながら、すぐ近くにあった丘へと登り、町が見えるか確かめる。

「見えるか？」
シオンは自分も遠くを見ながら言う

「んー、おっ、あれじゃないか？」
凱旋は遠くに小さく見える時計塔を指さす

「あ、あれが町っぽいな、よしあそこに向かおう」
シオンがそういうと、二人は丘を下り、町へと歩き始める

しばらくあるくと、金属音とにぶい音が聞こえた

「誰かが戦っているかもしれない言ってみよう」
と、シオンは走り出す
凱旋はその後を追いかける

―そこには、シオン達同様、ＦＷＯに囚われたプレイヤーと、３体の剣を持ったモンスターがいた

そのプレイヤーは、両手剣を持っていた、おそらく、ヘヴィブレイダーだろう
そのプレイヤーのＨＰバーは黄色くなっていて、徐々に減っていく

シオンと凱旋が、助けに入ろうとしたとき、そのプレイヤーはこけてしまい、敵にあっさりとやられてしまう
体が、砂が風に飛ばされるように、さ～　と消えていった

シオンと凱旋は、呆然としていたが、あの【管理人】の言葉を双方同時に思い出したようで、

「うあああああああ」
「し、死ぬのか、め、目の前で戦っていたのに」
どっちがどっちを言ったのかわからないぐらい、同時に言っていた

だが、敵はすかさずその声に気づき近づいてくる

「凱旋、今は敵を倒すことに集中しよう」
とシオン

「ああ、行くか」
と凱旋が言った瞬間に
敵が襲い掛かってきた

双方は、避け、凱旋がすぐに銃を向ける
パパパパッ　と連続音
敵の１体は、爆散した
シオンは、すかさず武器をだした
凱旋は、今気づいた、あ、あれはＡＫ４７じゃないか！？

シオンはパパパと、凱旋の武器より遅い連射速度だが撃ち出した。
敵の2体目が、爆散する
凱旋は、すぐに3体目に銃を向け撃ちはなったが！
パパパカチッ　っという音がして、弾がなくなったことに気づく

シオンもそれに気づき、残りＨＰの少なくなった敵にすぐに撃ちはなつ
敵を殲滅した。
ー ほんの1分以内の出来事だったー

双方、ふ～、と息を吐いて、銃をしまう

「あの人は本当に死んでしまったのだろうか、」
と凱旋は言う

「とりあえず、今日は疲れた、早く町について、明日考えよう」
ふたりは町へ向かう

その後敵は、なぜか1体も現れなかった

町に着いた
よし、とりあえず宿を借りよう
古ぼけた宿を見つけ、１部屋分３０００ギルを払い
２つのベットにそれぞれ、横たわる
そして、ふたりはすぐに眠りについた

ー翌日7：３４ー

シオンが起きた
「あれ、凱旋がいない」
シオンは部屋を見回すがどこにもいない
ドアがガチャリと開き凱旋が入ってきた
「なにしてたんだ」
シオンが聞くと
「いろいろ買ってた、武器屋に行ったり、アイテム買ってたり」
とシオンの横にきて、メニューバーを開き、見せる
「ＡＫ４７の弾薬じゃないか、」
シオンはすぐに気づく
「ああ、昨日シオンが使っていたからな」
と凱旋は、交換メニューを出すように指示し、送る
「俺は、Ｇ１８の弾薬買ったんだけどよ、店主がＧ１８をなんかプレゼントしてくれたんだよ、これでデュアルができるなｗ」
と凱旋は見せる、
「いいな～」
シオンは棒読み気味に言った
「今日は、この町のいろんなとこに行って、明日に備えよう」
凱旋はニコニコしながら言った
「よし、俺も店いってみたいし・・・」
シオンは言うのをやめて、呆然とした

「どうした」と覗き込むと、

メニューバーの右上に表示されていた時刻が、いつもは、想定時間００：００　と表示されていたのに、
１月２日０７：４１と、表記されていた。

これを見たシオンは、こう悟った

このゲームは、そのうち、現実そのものになるのではないか

と・・・

5．時計塔の町（後書き）

こんちゃ！
凱旋です。
実は、これを出すのもう少し伸ばそうかと思ったけど、
次のナツの下書き途中まででできてたｗ
それと、俺で止めると、後が大変になるからｗ
今回は、難しい終わり方してないと思うｂ
あと、武器やら職業やらは、
後日、掲示板みたいなものを作ることにしました
パチパチ
まだ未定ですが、よろしく
次のナツ・・・はもうすぐ終わりそうなので、
その次の和裏がんばれｗｗ
ナツも終わりまでがんばれｗ

6．ＹＥＳ，僕は眠れる王子様

ー想定時間１１時１８分ー

「おーい、シオンーそろそろ行くかー？」
シオンの部屋をノックしながら凱旋は言った。

「シオンーーー？」
ドア開けてみるとそこには寝ているシオンがいた。

「全く、よく眠るなー、まあ、仕方ないか」
時計塔の事件から三日間、和裏が居そうな町を目指して休まず歩き続けていたのだ。
だが、しかしＦＷＯはモンスターのポップ率が高いのか俺たちの運が悪いのかわからないが、モンスターとの戦闘が多かった。
そして、やっと村に着いたのだった。
目指す町まであと二日か三日と言ったところだろう。
以上の事があったので疲れる事は仕方ないのだが・・・
（あんなによく眠れるよな・・・俺なんてロクに眠れないのに・・・）

ー想定時間２時２４分ー

「おはよー今何時ー？」
やっとシオンが起きてきた。

「今か？２時２４分だぜ？てか、自分で見れるだろ？」
ああ、そうかと言いながらぼーっとしているシオン。

まだ、頭は覚醒していないようだ。

「顔洗ってくれば？」

「うん、そうする・・・・」

シオンが顔を洗いに行った、もう帰って来た・・・え？

「顔洗ったのかシオン？」

「それより早く和裏の所にいかなきゃ！」

どうやら覚醒したようだ。

「そうだな、まあ、誰かさんが昼まで寝てたから出発できなかったんだけどなー」

「起こしてくれたらよかったじゃないか！」

「あまりにも気持ちよさそうに寝てるからさー」

「・・・・悪かったよ、じゃあもう行こうぜ！」

確かにこんな事をしている場合ではない。

「そうだな、行くか！」

今日もまた、俺たち二人は和裏探しの旅に出る和裏探して三千里だ！

まあ、三千里は勘弁してほしいが・・・

ー想定時間２０時４２分ー

ぷぎー！

何度目かもわからないリトルピッグの叫び声を聞きながら凱旋が言

った。

「そろそろ、休憩にするか」

「うん、そうしよう」

今までずっと戦いながら歩いてきたのだ。

さすがに疲れる。

「町まではあともうすぐだなまあ、今日中には無理だと思うが」

疲労困憊な様子で言った。

二人ともうクタクタだ。

そんな時目の前にクエスト開始のウインドウが出た・・・

「なんだ、これ！なんでいきなりクエストが始まるんだ！」

「実はな・・・このゲームＦＷＯは自由さが売り出していたんだ・・・

だから、緊急クエストみたいなのが起こるのは認めたくないがありえる」

頭を抑えながら凱旋は言った。

この疲れている時に・・・どんなクエだ！

何・・・？狩猟クエ？で、その狩猟相手は・・・

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

その時大気が震えたそう・・・狩猟目標は・・・

ＴＨＥ　ｙｏｕｎｇ　ｄｒａｇｏｎ・・・

幼い竜！？幼竜か！てかこれで幼竜か！そうか！幼竜なのか！

いやいや幼竜なのか？だって翼あるし・・・口から火でてるし・・・

大人の竜はどんなのだよ！

そんな事を思っていると。竜が頭を反らし始めた。
ブレスのモーション!?そう思った僕はおもいっきり上に跳躍した・・・
あ、あぶねえ!さっきまでいた場所にクレーター出来てんぞ!!!
どうやら凱旋もよけたらしい、さすがだ。

「グオオオオウ!」
ちっ!勝てるかはわからないがやらなければ!
クエストで逃げる事はできなくなっている!
僕はそう思いながらも相棒のトリガーを引き絞ったカンカン
弾は虚しく竜の鱗にはじき返されただが微量だけＨＰが減っている・・・
だが、微量過ぎる俺たちが弾切れになることは目に見えている。
だが、僕はこんな所で死にたくない!凱旋、和裏と一緒に現実に戻るんだぁぁぁぁ!
撃った、撃った、撃ったそれから僕は無我夢中に撃ち続けた。
だが、そんな健闘も虚しく、竜のＨＰは半分も減っていなかった。
弾はあと３０発ぐらいだ・・・絶望的状況だがゲームの中だからか死ぬ気はなかった。
だが、つぎの瞬間、竜がまたもブレスを放ってきた!
くっ!
避けろと僕は体に命令するが、体は動かない。
こんな所で僕は死ぬのか・・・
その時俺の前に一筋の緑色の光が見えた。
あれは、なんだ?

「我は、疾くあり、腕ある狩人なり!!!」
次の瞬間もの凄い速さで僕の目の前にき、その人は僕を抱きかかえ跳躍した。
凄い跳躍力だ!僕はその人のおかげでブレスに当たらずにすんだ。

「やあ、君がシオン君かい？美しいね、俺はナツだ以後よろしく」
ちょ、跳躍中に言われても困るんですけどおおおおお！

「おいおい、何キモイ事一店だよ、ナツ」
誰だと思ったがそれは和裏だった。

「キモイとは失敬だなー和裏」
よく跳躍中に話せるなこの人！てかまだ跳躍中てどんなけ飛んでるんだよ！

「まあ、あの幼竜さんに一発かましてくるは」

「いってら」
ナツと凱旋が同時に言った。軽くないこの二人！？
和裏は跳躍しそして剣を大きく振りかぶった・・・
あれはキャパシティーを発動するためのモーションだ。
キャパシティーには二つ種類がある。
モーションキャパシティーとボイスキャパシティーだ。
モーションキャパシティーは攻撃にすぐれ
ボイスキャパシティーは補助にすぐれる。
ナツが使ったのはボイスキャパシティーだ。
キャパシティーはＭＰを使うしモーションもとらないと発動してくれないいのだが
キャパシティーは最大級の威力を発揮する・・・

「くらえ！ファイヤーローテーション！！！」
とたん和裏の剣が火を吹き出した。
そのまま回転しそして、また回転、そしてまた、三連続空中キャパシティーだる。

だが、幼竜のＨＰは相変わらずあまり減っていなかった。
どんなけ強いんだ！反則だろ！
流石の和裏もこれには驚いたようだ。
この、幼竜に勝つ方法は・・・・・・
くそっ！思いつかない！だが、俺が考えている間にも
凱旋、ナツ、和裏は攻撃を続けている。
凱旋の弾が幼竜の翼に当たった。
竜ＨＰが普段よりかは減った。
そうか！これだ！だがこれをするには跳躍力そして
弾丸を精密にコントロールする必要がある・・・・・
成功する確立は２割もないかなしかも、成功しても絶対死ぬとは
言い切れないし・・・
だが、しかしやれなければ、勝てることはない。
なら、当たって砕けろだ！

「凱旋！弾が余ってる鉄砲はある？」

「ハァハァＧ１８の方はあと４０発ぐらいある」

「貸してくれ」

「いいが・・・どうするんだ？二丁になってもあんまいみないぜ？」
僕は凱旋の疑問に笑って答えた。

「和裏ワイヤーはある？」

「あることにはあるが・・・ここ、森だぜ？引っ掛ける
とこねえぜ？」
和裏の疑問にも笑って答えた。
僕がやろうとしてることを教えれば無理だ、と言うだろう。

僕は凱旋のG18を腰のホルスターにいれワイヤーを片手に持ち
竜に向かって走った。

「おい！何やってんだシオン！」
三人の僕を呼ぶ声が聞こえるだが、立ち止まる訳にはいかない。
僕は竜の攻撃を避けながら走った。
そしてそのまま竜の・・・・・・
横を通り抜けた、よし竜も追いかけて来てるいい感じだ！
そして、目の前にある木を蹴り、竜と同じ高さくらいまで跳んだ
（やはり僕にはこれくらいが限界か・・・）
しかし、片手に装着しているワイヤーで
竜の首を締めながら竜の上に乗った。

（アニメや漫画ではこうやって上に乗って首を締め付ければ竜は飛
んでいた、どうだ・・？）
幼竜は小さい翼をはためかせ僕の思惑通りに飛んだ。

「おい！シオン大丈夫か！？」
下から凱旋の声が聞こえる・・・

（これじゃあ高さが足りないもっと上だ！上だ！）
僕はもっと強く首を締め付けた。
グオオオオオオ
幼竜は苦しそうな声をだしながら小さい翼をはためかせ。
飛んで行く、くっ！た、高いいいいいいいいい！
もうう、腕が・・・僕はワイヤーの手を放してしまった。
ここからが、正念場だ・・・！
幼竜は小さい翼をはためかせ、僕に近づいてくる。
まだだ、まだ、今だ！
僕は両手に持っている銃を両方の翼、一点に向かって発射した。

翼は傷が付きついには、バキッ、っと翼を貫通した。
部位破壊だ！だが、これだけでは竜は落ちない。
たいして僕は落ち続けている。
地面まで距離はまだあるか・・
僕は気合を入れなすと部位破壊で少しの間だけ
硬直していた竜に向かって再び銃を撃った。
バンバンバン！マズルフラッシュが巻き上がる、
バンバンバン！バンバンバン！バンバンバン！
僕は竜の翼に向かって何発も打ち続けた。
グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！

叫び声がした見てみると竜も落下を始めていた。
よし！目標は果たせたみたいだ、だが、もう両銃とも
弾がない危機一髪だったな。
いやーそれにしても・・・・・
この状況どうするかね？
僕は、死ぬのかな？
ハハハそうだった、これをしたら僕も死ぬんだった
気づかなかった、まあ、いいか、みんなは死なないし
僕はそんな事を思いながら落ちて行った・・・

「シオン！死ぬ気じゃねーだろうなー！」
落下中で風の音で普通声など聞こえるハズがないのに、
みんなの声が聞こえた気がした。

そうだ、僕はこんなとこで死んではいけない！
みんなと一緒に元の世界にもどるんだ！！！
だが、どうすればいい？
こんな状況で・・・
よく見ると目の前にクエストクリアのウインドウが出ていた。
幼竜は僕より重いので先に落ちたみたいだ御臨終です。
僕は落ちながらなぜかクリア報酬のアイテムを見た。
こんなことしている場合ではないのに。
僕は一つの武器に目が止まった。
≪ジャベリン≫
これはなんだろうか・・・？
僕はリアリティ化してみた。
おお、これはロケランか！？
なら爆風でこの落下の速度を落とせるかもしれない！
僕はそう思いジャベリンを撃ってみた・・・
ジャベリンから放たれた弾は上に向かって飛んでいった。
（・・・・・・・・・・・・・・・・・・上かよ！！！）
僕は絶望した・・・
し、死ぬうううううう！！！
ヒュルルルルル
ジャベリンが落ちてきたなるほど上行って落ちてくるのか！
なんで一回上行くんだよ！！！
ま、まあいい、爆発のおかげで勢いが収る・・・
ドカーン！！！
あ、熱いい！なんて熱さだ！い、痛てえ！体が焼ける！
威力強すぎだろ！！！だ、だがこれで勢いが・・・
ドスン！うっあんま収まってなかった・・・
だ、だがなんとか生きてるＨＰが全損してない！
うっあ、頭を打ったかめまいがする・・・
僕の視界は暗転したのだった。

「シオン！シオン！大丈夫か！」
凱旋と和裏が走りながらシオンの名前を呼ぶ。

「大丈夫だ、シオン君は寝てるよ、眠れる王子様だね」
ナツが笑いながら言う。
い、いや、それは気を失っているだけでは・・・？
だが俺と和裏は突っ込まなかった、メンドクなりそうだからだ。
けど何がともあれみんな生きてるシオンのおかげだ！

「この近くに村があるから行こうぜ！」
そうして、四人は近くの村を目指すのだった・・・
神様これからどうなるんすかね？俺たち戻れるんすかね？
俺は天を仰ぎながら言った。
神様の返答はもちろん“さあな”だった。
・・・・・・・・・・・・・・・
さあなって神様！俺神様としゃべれるんすか！
神様お願いです俺たちを元の世界に戻して下さい！！！
だが、もう神様の声は聞こえなかった。
俺は再び天を仰いだ・・・・・

6．ＹＥＳ，僕は眠れる王子様（後書き）

後書き♪
いやー書けました！書けましたよ！
僕は確信しました戦闘シーンは多くするべきからずと。
戦闘書くのは大変だった！もう途中で嫌になった！
だが書けました！書いてやりましたよ！
コノヤロー！！！
さあ、僕の嘆きはここまでにして、
次からどうなるんですかね？
和裏頑張れ！次からの話俺には全く見えない！
ではまた会いましょう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9544w/

FWO -ファンタジー ウォー オンライン-

2011年12月25日17時50分発行